

論文審査の結果の要旨

本論文は、中国近代を代表する文人である豊子愷（1898—1975）によってなされた、平安朝の物語四作品——『源氏物語』と『伊勢物語』『竹取物語』『落窪物語』——の初めての中国語訳について詳細に検討し、従来なかった新しい見解を提示したものである。

豊子愷による『源氏物語』の中国語訳は、元来、日本を代表する古典の紹介のために出版社からの委嘱された仕事であり、翻訳作業は1961年に着手され、1965年には無事完成を見たのであったが、折から文化大革命（1966—1976）の煽りを受け、実際の出版は、豊子愷没後の1980年から1983年にかけてのことであった。

第一章では、まず、豊子愷訳『源氏物語』の翻訳作業のベースとなった文献を、豊子愷自身による「訳後記」の記述を吟味の上で、実際には、与謝野晶子訳『源氏物語』、谷崎潤一郎訳『源氏物語（旧訳）』、佐成謙太郎『対訳源氏物語』、金子元臣『定本源氏物語新解』の4点に絞り込めることを、翻訳に付された脚注の子細な検討から明らかにした。また、豊子愷の自筆原稿について、自ら豊子愷記念館に赴いて実地調査した結果、現行の活字本が出版されるに際して、出版社並びに娘の豊一吟によって、原稿にそのまま加筆・修正が行われたことを明らかにした。また、豊子愷訳『源氏物語』は、中国における初めての『源氏物語』の全訳であったが、その後も中国では『源氏物語』の全訳が、殷志俊訳（1996年）、梁春訳（2002年）、姚継中訳（2006年）、鄭民欽訳（2006年）など、陸続と刊行されているが、鄭訳を除けば、いずれも豊訳の表現を踏襲しており、著作権上からも問題であることを指摘した。

第二章から第四章では、『伊勢物語』『竹取物語』『落窪物語』の中国語訳について検討を加え、いずれも豊子愷が所蔵していた河出書房版『王朝物語集（一）』（1956年再版）所収の現代語訳からの重訳であり、古典の原文を座右においての『源氏物語』の訳業とは、かなり性質を異にするものであることを明らかにした。中でも、中河与一訳によった豊子愷訳『伊勢物語』は、今日流布本として広く読まれている天福本の本文と比較すると、章段分けが異なっているほか、章段末の注記が削除されていたり、「桜」を「梅」とした誤植が翻訳にそのまま残ったりしており、底本のもつ問題点がそのまま中国語訳にも露呈したことを明らかにした。また、川端康成訳によった豊子愷訳『竹取物語』には、未完の自筆原稿が存することを新たに突き止め、活字化されたものとの比較から、それが川端訳を忠実に中国語訳にした、初稿ともいふべきものであることを明らかにした。

本論文を作成するに当たり、申請者は豊子愷の故郷である浙江省桐郷市の豊子愷記念館まで度々足を運び、資料の閲覧、蒐集につとめたことが多くの新発見につながったといえるが、なお、豊一吟等の豊子愷の子女が引き継いだ資料が、それぞれの手元に未公開のまま残されており、それらを含めた検討は、今後の課題である。

以上のような観点から、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。